

Fonte

発行 NPO法人全国不登校新聞社
www.futoko.org

■東京編集局 〒114-0021 北区岸町1-9-19
TEL 03-5963-5526 FAX 03-5963-5527
mail to: tokyo@futoko.org

■名古屋支局 〒464-0036 名古屋市中千種区本山町2-33-1
TEL 052-759-2375 FAX 052-759-2376
mail to: nagoya@futoko.org

■大阪通信局 TEL 090-8481-7979
mail to: osaka@futoko.org

Fonte について...

Fontelは、ラテン語で「源流から」の意味。この新聞では、不登校から見てきたことを源流として、広く子どもに関わる問題や、ひきこもりや社会のあり方について考えていきます。

本号の紙面

- 2面 連載「いのちとはなにか」
AID当事者らが会を設立
- 3面 論説・奥地圭子
「高校無償化のかげで」
- 4面 声・「高校無償化に思う」
はっつけアート
- 5面 子ども若者編集部企画
「いざムシ料理の世界へ」
- 6面 恩田夏絵さんに聞く②
ピースボートの学びを
- 7面 映画評「アヒルの子」
不登校の歴史・奥地圭子
- 8面 親の会情報、infomation ほか

今回は恩田夏絵さん(23歳)。小中学校で不登校をし、現在はピースボートで働いている。今年、船の中でフリースクールを開きたいという念願が具現化するそうだ。恩田さんに、不登校経験について、準備されている「グローバルスクール」について、うかがった。



ピースボートスタッフ/不登校経験者 恩田夏絵さんに聞く

海の上にフリースクールを

「いつから不登校をしていましたか?」
「いつからかというのはいくらもありません。義務教育期間、だいたい半分くらいしか行ってません。学校があわないうか、「学校ってなんなんだろう?」と、はじめて疑問に感じたのは、小学校2年生のときからです。それから行った

り、行かなかったりをくり返していました。中学校は、ちゃんと行ってみようと思ったんですが、半年くらいで行かなくなりまして。今度は、ただあわなうて行かなくなるといふより、人間関係に悩みました。というのも、中学生になると、いじめとか、思春期だからというか、他

人と自分がちがうことへの理解が追いつかないんだと思うんです。とくに女子は「みんなと同じに」っていう圧力がすごい。集団トイレや流行りすたり、全部が全部、みんなの空気を読んでいないといけない。空気を読んでいないと、人から拒絶されるし、仲間はずれにされたら怖い。私も、みんなにあわせようとしたこと

もありません。あともう一つ、「がんばるのがダメ」っていうのもキツかったですね。空気が読めない姿勢が一番よくて、がんばるのはカッコ悪いこと。そういう空気を打破したかったんですが、痛い目にあつたので、それはその後ひきずりました。

ひきこもりは私の原点
それは何から?

中学校2~3年生のときは、ほぼガッチリひきこもりました。この2年間は、自分のなかの原点だと思ってるんです。表面上は、和太鼓や芸術関係の趣味を持ってたということがありますが、内面ではすごく葛藤しました。苦しかったですが、やはり、この期間は原点になっています。

ついでに、ひきこもっていたとき、いろんなことを考えました。なんで自分はこんな状況になつてたのか、なぜ人間関係はうまくいかないのか。最初に直面したのが自分を責めることでした。とにかく自分がいけない、変わらなきゃいけない。それを頭で考えられればいいんですが、気持ちに頭が追いつかなくて、リストカットをくり返す。そういう生活をずっと続けていました。その後、親を否定する時期に入り、親を拒絶したいという思いから、高校に行き、アルバイトも始めました。心はひきこもりっぽですが、自信が持てず、自傷や他人への依存で、なんとか自分のバランスを保っている状態でした。

なにか道がないかと、和太鼓に専念したり、アート系に進もうと思っていました。が、やっぱり自分に自信がなくて、どこかブレていたので、うまくはいかなくなりました。これは「なにかをやる前に自分の芯を持つ」とが先だなって思ったんです。そこから先は、ものすごく単純で、自分の視野を広げるために世界を見てみよう。 (6面につづく)

トイレ、流行、みんないっしょに... 苦しんだ「空気」

桜の季節が巡ってきた。桜の花を見つめる瞳にも、人の喜びや悲しみ、一期一会の思いを託して、それぞれの桜の命を宿して、一昨年、私は大病を患い、病床のうえで「かき火」の原稿を娘に口述筆記してもらった。病室から見える桜が見事だった。桜吹雪の中を泣きながら、わが子の手を引いて学校へ往復した人もいたことだろう。桜並木の少年院に子どもを迎えに歩いた人もあつたかも知れない。桜という字は元来「櫻」と書いた。木偏に「嬰」である。「嬰」とは貴重な貝のことで、「嬰兒」とは生まれたばかりの赤ん坊のことだ。そのかけがえのない子どもの命が、虐待で失われる事件が相次いでいる。子どもの命は天からの授かりのものもある。子どもに出会えた喜び、感動を忘れたくないものだ。最近『子どもたちが語る登校拒否』を書いた若者たちから、結婚して赤ちゃんができたという嬉しい便りが届く。「十分間の卒業式」という文章を寄せた札幌のAさんにも、昨年末新しい命が誕生した。長い冬を乗り越え、春の喜びを感じておられるであろう。新米の親たちにも、緊張や疲労が出てくるころだ。そんな心を桜の花は優しく見守ってくれるにちがいない。赤ちゃんの初めてのお花見が、家族の絆を深め、豊かな人生になるよう祈りたい。(も)

閉塞感のある社会で生きていくには、**生きたいように生きる**。

最新刊登場! 『閉塞感のある社会で生きたいように生きる』
2月上旬から書店販売! 四六判並製 208ページ 1680円

辛淑玉さん推薦!
この大学が起しているのは、時代が後からついてきたから。人生の回答の道筋が、ここにある。

好評発売中
不登校は文化の森の入口

フリースクール
ボクらの居場所はここにある!

東京シュール出版
Web: http://mediasure.com
Mail: info@mediasure.com
〒116-0068 東京都新宿区後町8-5 Tel/Fax: 03-5380-3770

読むだけじゃない ひろがる、つながる雑誌「We」
こんな生き方 あつてもいいなあ

2010 164号
「We」隔月刊 A5判・80頁・800円
年間購読 5,000円(税別)

特集・つながりのなかで 安心して生きる

【インタビュー】うてつ あきこさん
小さな居場所「こもれび」の日々
——女で援助職であることの葛藤

【インタビュー】堅田 香緒里さん
ベーシック・インカムに女性の視点を

【連載】ミボージン日記 竹信三恵子 / 同時代の男性学 沼崎一郎
取り戻しアフター・嵐の日々 鈴木水南子 ほか

フェミックス | tel: 03-3511-0028 | http://www.femix.co.jp/

